

「そのように、これらの小さい者のひとりが滅びることは、天にいますあなたがたの父のみこころではない。」(18節)主イエスの叫びが聞こえてきます。『あなたに、何としても神の国に入って欲しい。命に入って欲しい。』主イエスを信じて、1人残らず神の国に入って生きよと、主イエスが、私たちに呼びかけておられます。

この日弟子たちは、神の国で誰が一番えらいか、という話をしていました。主イエスは弟子たちの真ん中にこどもを立たせ、このこどものように「わたしを受け入れる者」が神の国にはいることができる、と言われました。こどもが親のふところに飛び込むように、神の子とされて、神の国で生きたら良い、と主イエスは言われました。

これに続く部分には、できれば聖書の中にこんな言葉は入って欲しくない、そんな言葉が語られます。「もしあなたの片手または片足が、罪を犯させるなら、…片手、片足になって命に入る方がよい。」(8節)とても過酷な命令です。しかし、今朝の御言葉全体に目を向けて、一匹の羊を捜し出す羊飼いのたとえにたどりつくると、何とかして私たちが神の国に入らせ、永遠の命を持つ者にしようとなさる主イエスの姿が浮かび上がります。ご自身が、そのためにどれほどの犠牲を払って下さったかに気づかされます。

もしあなたの手や足、目があなた自身をつまづかせ、あるいは小さな者、他者を神から遠ざけるようなことがあるなら、むしろそれらを失ってしまった方が良いでしょう。これは犠牲の話です。神の国に入るための犠牲の話です。

私たちが罪を赦され、神の国に入ることができるようになるために、主イエスは激しい口調でお語りになりました。私たちはこの神の愛を少しも理解することができず、主イエスの命がけの愛を受け入れることができないので、すぐに自分と他者とを比較して安心しようとしています。主イエスは、このような私たちが、神の目の前でどれほど小さな者かをご覧になって、激しい愛を燃やされました。

神は熱情の神です。完全にして聖なるお方ですから、私たちの不信仰や中途半端な信仰の姿をそのまま受け入れることはなさいません。かつて神の民ユダヤ人は律法を守ることによって神への愛を表し、神に仕えて生きようとしていました。そうして自分と他者とを比べながら、自分だけは神の目に留まる存在だと思い込んで歩み

ました。神の国で誰が一番えらいか、に関心を向けた弟子たちも同じでした。

主イエスは、神の国に入るための犠牲についてお話されました。自分の一部どころか、体全体、命の全てを失っても、永遠の命を得る方がどれほど幸いか、を語られました。そしてその通りに、主イエスご自身が、その命を犠牲として与え尽くして下さいました。

私たちが自分の財産や命まで、持っているものの全てを捧げても、罪の赦しを得て、神の国に入ることは出来ません。私たちはいつでも、神のさばきを受けるべき罪人だからです。16世紀の宗教改革者や、多くの信仰の先輩たちも、この罪の赦しということについて本当の解決を求めました。そして聖書の御言葉から、ただ神の恵みによって、ただ主イエスを信じる信仰によってのみ罪を赦され、神の子とされる、という福音を聞き取りました。

エゼキエル書で語られた通りに、迷い出た羊を捜し出して連れ帰るために、神は主イエスを地上に送り、罪の赦しのための犠牲として下さいました。主イエスは本当の羊飼いです。私たちが神の国、緑の牧場、命の水のほとりに導き入れて下さるお方です。この福音を聞いた者は、もう黙っていることができなくなります。ひとりの人が滅びることをお望みにならない神の御心を知って、その熱情に押し出されて、隣り人を愛し、その人に仕え、その人の救いのために用いられていきます。

神は、尋ね求める神です。私たち一人一人を求めて、取り返そうと熱心に探し求めて下さるお方です。そのために、私たちひとりひとりが用いられていきます。この世を、大きな悲しみや不安が覆い尽くしているように見える時、嘆きと流血の地のただ中で、しかし私たちは神の憐れみに目を向け、神の御心を思い出します。主イエス・キリストは、神の国を私たちに与えるために十字架に歩いて下さいました。主イエスを信じる者が、一人も滅びないで永遠の命を得る、ただこのためだけに主イエスは来られました。今日も、世界中でこの福音が宣べ伝えられるために礼拝が守られています。ひとりまたひとり、神の国に入れられる者が起こされること、神の御心だからです。

(記 岡村 恒)